

## 情報専門職としてのライブラリアン

松岡伸枝\*

司会：伊藤真理\*\*

平成26年度人間情報学会第1回講演会

【司会】最後の授業日で、お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。

今日は、第1回の人間情報学部の講演会として、テーマとして「情報専門職としてのライブラリアン」ということで、アメリカのワシントン D. C. にあるアメリカン大学の音楽図書館で館長を務めていらっしゃる、松岡伸枝さんを講演者としてお招きしました。ご紹介は、ご自分で講演の最初にしてくださいということなので、私のほうからは省かせていただきます。

このタイトルにありますように、アメリカのアカデミックライブラリアンということで、大学図書館の司書をトピックとして、その観点から情報職の専門性ということに触れていただく予定にしております。日本とアメリカの違いなどもありますけれども、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。また、松岡さんは、日本の大学図書館の人的リソースについても研究されていますので、そのあたりも加味しながらお話しいただけるとと思います。

これから1時間程度ですけれども、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。では、よろしく願いいたします。

おはようございます。松岡伸枝です。今日は、すごく楽しみにしていました。私の声聞こえますか？

私はワシントン D. C. から来ましたが、音楽舞台芸術の専門司書をしております。伊藤先生とは7年前にお会いして、前回、6カ月ぐらい前ででしょうか、学生さんをお連れになってワシントン D. C. におみえになった時に、来てくれないかというお話が出まして、今日はほんとうに楽しみにしていましたので、よろしく願います。

いつもは英語でばかり話しているのですが、今日は日本語で初めてで、ちょっと緊張していますので（笑）、何を言うか分からないのですが、お許しください、ということ……。

自己紹介ですけれど、私の出身は名古屋なので、今日はやはり自分の自宅に帰ると同時に、こちらにも来させていただいたのですけれど、出身は名古屋で、学歴は、学士をロヨラ大学で音楽科打楽器パフォーマンスコースで取っています。それはニューオリンズだったので、ロヨラ大学は。その後、サザンメソジスト大学の大学院に行きまして、それはダラスにあるのですが、それも音楽科で打楽器パフォーマンスコースで出ました。その後、日本に戻って2年働いたのですが、図書館の職員として働きました。その後、LSU、ルイジアナステイトユニバーシティというところで、MLS、司書の修士をとりました。

職歴は、大学のころからバイトしていたんです。インターナショナルスチューデントだったので、お金がなかったのですが、学内でバイトできる場所は、カフェテリアか図書館だったので、だから、ぜんぜんチャンスがなくて、じゃあ図書館でやろうと。そういうきっかけで、大学の時にもバイトで図書館で働いておまして、大学院に行った時も図書館で働きました。その後、大学は母校に帰るのですが、ロヨラ大学とい

\* Music Library, American University

\*\* 愛知淑徳大学人間情報学部

うところで、ILLとドキュメントデリバリーの職員として、そちらで働いていました。その後、ちょっとユニークなんですけれど、牧師さんの大学があるんですね。牧師になるために行く学校なんですけれど、男の子だけ。セミナリーというのですけれど、セミナリーの中の図書館で働いていました。そこでの担当は、カタログとレファレンスですね。

それと同時に、グーグル、知ってみえますよね。グーグルで、いちおうバーチャルに働ける仕事がありまして、アメリカで、いちおう「ジャパニーズクオリテーター」という肩書をいただいたのですけれど。グーグルでしばらく働いて、バーチャルで。その後、今のアメリカン大学に来たということです。7年前ですね。そちらで司書をしております。これが職歴です。

アメリカ人はけっこう反応がすごいので(笑)、今日は、何かこういう形でレクチャーをするのは初めてなので、ちょっととまどっていますけれど、僭越ながらいきなり振るかもしれませんので、寝ないように(笑)してください。そういうことで、インタラクティブにやらせていただきたいと思います。

みなさんこちらを卒業されて司書になられた時には、色々な職種の可能性があると思うのですけれども、アメリカでも、けっこう同じようなものです。どのくらいアカデミックライブラリアンを目指してみえますか？ アカデミックを目指している人、いない？ いない？ 手を挙げて！ いない！ パブリック、公共図書館司書は？ けっこう公共図書館司書は多いんだ。あとは、専門図書館司書の方？ 挙げない人、なんですか？ 挙げない人は(笑)決まっていないというか……。

アメリカでも同じようなもので(スライド2参照)、アカデミックライブラリアンと、公共ライブラリアン、あとは専門の図書館司書があります。法学・医学というのは、こちらとっしょのように、やはり大学の中でするので、いちおうアカデミックの区分になりますけれど。あとは、みなさん、これはやはり授業でやられたと思うんですけれど企業と政府というのがあります。企業というのはメーカーさんですね。メーカーさんとかのリサーチのヘルプをすとか。それから、レコードマネジメントという仕事がありまして、司書さんがよく就職します。書類の整理なんですけれども、政府はかなり義務づけるんです、大きい会社とか。こういう書類は、絶対何年間保管しないといけない、とか。そういうのをちゃんと整頓してキープする、保存するのが司書の仕事としてあります。あとは政府関係の司書は、国会図書館。アメリカでも、アメリカ議会図書館がありますし、そういうのは日本でもあると思いますけれど。

次、いきなり給料の話をしします。これは(スライド3参照)、一番上にあるのは中央値ですので、平均ではありません。一番下と一番上を並べて、一番真ん中をとったものです。560万円、このデータはいちおう政府の、日本でいうと国勢調査みたいなものなんですけれども。2012年のデータなので、これよりはちょっと、今は多いと思うのですけれど。560万円ほどです。

給料の範囲って、これはちょっと低いんですけど、220万円。これはALA(アメリカ図書館協会)の調査のデータですので、この上ですね、この3400万円。誰がこんなに稼いでいるのか分からないのですけれど。たぶん1人の人じゃないかと思うのですけれど。やはり大学図書館とか公共図書館の人は、現実的にはこの数字が近いかなという、そのような金額です、私たちの給料は。左右するのは、田舎に行くとやはり給料は安く、都会にいとやはり住む所も高いので、そういう手当もたまにつくことがあります。それでちょっと多いのです。

では、伊藤先生にも言われたのですけれども、この違いを言ってほしいと。日本では、けっこうライブラリアンの方がスタッフの仕事をするところがあるので、ちょっとこの違いを強調させていただきます(スライド4参照)。アメリカの場合は、やはり大学教員の資格をいただきますので……後で話しますが……。いちおう、そういうランクをいただきますので、経営に携わる権限を持ちます(スライド5)。そういうことで、ストラテジックプランニング——ストラテジックプランニング、習いましたか？ 2年生の方(笑)、後で説明してもらいますよ、いいですか(笑)。すごく重要なので、これは今日は分かって帰っていただこうと……。どのようにストラテジックプランを、どうやって成し遂げていくのかというのは、後で勉強しましょう。

ストラテジックプランニングをする。その場に応じた多様な任務をしますので、決められた任務というのは、ほとんどないですね。教員の方とほとんど同じです。これをしなきゃいけない、教えなきゃいけない、最低限のことはありますけれど。例えば、書架整理とかカウンター業務とか、そういうのは、私たちの義務じゃないです。私もたまたまシェルビングですとかするのですけれども、それは私が率先して、どういうものが出回っているのか見たいということで勉強するためにするわけで、それは私たちの義務ではありません。職員の方は権限、決済権限を持ちませんので、経営に携わることはほとんどないそうです。あと、限られた任務を成し遂げる。シェルビングとかカウンター業務ですね。こちらは、やはりスタッフの方がされます。あと、レファレンスはやはり専門知識がいるということで、ライブラリアンの人がほとんどします。

最近の傾向としては、スタッフの方もけっこう司書に向かって頑張ってみようという方がいるので、そういう方にたまたまレファレンスでお手伝いしてもらうことはあるんですけども、ほとんどはレファレンスは、やはり司書の人がやります。

それで、一般的には、やはりスタッフの方はスーパーバイザーが上司の方が司書なんです。だから司書の人が、いつも指導と管理をして、スタッフの方の管理をして。タスクも司書の人が職員さんのタスク任務を「これをやってくれ」ということを、やはりします。だからスタッフの方は、ほんとうに限られた任務をきちんとやります。

では、ストラテジックプランにいきましょう。ストラテジックプランというのは、誰か説明できる人はいますか。手を挙げて。なにか、みんな目を合わさないようにして(笑)……。ストラテジックプランというのは、目標とはちょっと違うんですね。だから、そちらのほうを分かっていたきたいのです。

目標というのは漠然として、ゴールということになりますよね。大学のゴール。ストラテジックプランというのは、どのようにしてそれを成し遂げるかという段階です。それまでも決めてしまおう、ということです。司書の仕事として、これがありますので、これは理解していただきたい。これはスタッフの方にはできない。だから、この目標との違いは、ここにあります。ストラテジックプランは、ゴールとアクションということです。

どのように達成するか？ これをちょっとお話ししたいと思います(スライド6参照)。これは大学の目標、図書館の目標。こうやって下りてきますけれど、目標というよりは、ストラテジックプランなんですけどね。うちの大学、アメリカン大学としてはストラテジックプランは16掲げています。2008年に大学側が16掲げまして、その中の2つの例をとってお話ししようかなと思っています。ストラテジックプランというのは、毎年変わるものではなくて、やはり5年単位とか10年単位とか、そういうものなので、大学はやはり将来のことを予測してストラテジックプランを立てるということですね。

この例として、アメリカン大学での16あるうちの2つをここに出したのですが、「多様性を尊重し、サービスに反映する」——大学がストラテジックプランとしてこれを出しました。図書館の目標としては、これをどのように達成するか、というふうにしなきゃいけないです。そう考えると、図書館の目標としては、ダイバーシティをどのように理解するかということになります。日本語でもダイバーシティは使っているでしょう。分かってみえると思うのですが、多様性。ただ国民性とか人種の違いだけでなく、カルチャーの違い、人種の違い、あとセクシャルマイノリティとしての同性愛者の方、性転換をされた方、そういう方の意見も尊重して差別することなく、みんなから学ぼう。やはり知識は、違う知識を持っている者から、そういう人達から全部学ぼうということで、それをサポートするために大学は目標を作らなきゃいけないということなのです。では大学図書館は、このストラテジックプランに対して何が出来るか。何が出来ますか？ 何か意見のある人、ないですか？ ない？ じゃあ、私が言います。

図書館としては、このダイバーシティを支える本とか、データベースとか、資料を集めよう。例えば性転換をしているとかゲイの方、同性愛者の方がみえるんだったらば、ただ読み物的なものだけでなく、エデュケーションに関した、歴史的にどういふふうになっていたかとか、心理的にとか、あと医療的にどういふ違いがあ



るかとか、そういう資料を出せるように図書館が提供しよう、そういう目標になっています。ストラテジックプラン。それから、こちらに下りてくると（“司書と図書館職員の目標”の段階になると）司書と職員ができることは、それに関して何を購入しよう、いくつ購入しよう、分析しよう、そういうことです。

第2のストラテジックプランである、“Enhance University Library and Research Infrastructure” 大学図書館と研究基盤の向上を目指す。これは16の中のひとつに入っていますから、じゃあ、これをどうやって理解しよう、図書館の中で考えます。司書が集まって、じゃあ、どうやってこれを目標にしようか。そうした時に、うちの図書館はどのようにしたかという、じゃあ図書館を利用者の居場所・時に関わらず、必要な情報を提供する。それを組み込みました、図書館の中でのストラテジックプランとして。

それをどのように司書と職員がするか。いつでもどこでも、というストラテジックプランなので、図書館としてサービスの提供をするには、どうしよう。これは簡単ですよ。やはりオンラインでのサービスを向上する。オンラインサービスを向上して、あとIMレファレンス、インスタント・メッセージもできますし、電話、メール、場合によってはビデオのレファレンスもします。

このようにしてストラテジックプランが上から下りて来ていますので、ゴールだけでなく、どのようにそれをやっていくか。だから、個人まで来ますので、そのようにみなさんに考えてもらうことになります。

司書がして、スタッフがしないというのは、ガバナンスに関わることです（スライド7参照）。ガバナンスというのは、支配とか経営とかになるんですけど。スタッフは、それをやる機会がないのですけれど、司書はやはり図書館を出て、大学ぐるみの貢献をするということで、大学の経営にも関わる。どのように関わるかという、大学の委員会のメンバーになる。それは、他の教員と同じようなものですが、こういう委員会が大学の中であると思うのです。そこで貢献するというのです。職員の方は、これをやる機会がないのですけれども、司書はやります。

アメリカの大学、アカデミックライブラリアンとしての任務ですね（スライド8参照）。これは日本でも今はやってみえると思うのですけれど、インフォメーションリテラシーのクラスがほとんど主ですね。メインでやっていますので。うちの大学のライブラリアンも、場合によっては1学期に50クラス教える。50とか70とか教える人もいますね。私はだいたい5か7クラスぐらいなんですけれども。そういうようなことをやっています。

あと、コレクションデベロップメント。コレクションデベロップメントは、みなさん、学びました？ ないですか？ 学びました？

コレクションデベロップメントというのは、ただ購入とかじゃなくて、購入もありますけれど、予測してコレクションがどのように育っていくかという、そういうことも分析しないといけない、予測もしないといけない。すごく大切なことですので、これは日本の司書になるとちょっと違うと思うんです。そういうこともやってみえる、こちらの図書館ではやってみえると思うのですけれど、愛知淑徳大学の図書館では、他の大学では、コレクションデベロップメントはベンダーさんに任せるといことがあると聞いていますので、ここはすごく違うと思います。もうちょっとしたら、また話しますね。コレクションデベロップメントは、すごく重要な私たちの仕事です。

次に、図書館利用者の必要とする情報を提供し、リサーチ記録を提供するというのです。これは、レファレンスとか、いろいろなバーチャルのレファレンスもありますし。

あと、オンラインのサービスを充実させる。やはり図書館のストラテジックプランの1つとしても、どこでもいつでも、いつでもどこでも、ということで、ということは、今はオンラインになってしまう。レファレンスの例を、ちょっとお見せしようと思って。もちろん、日本の図書館もやってみえると思うのですけれど。

これが、うちのオンラインのヘルプなんですけれど（アメリカン大学図書館ウェブサイト <<http://american.edu>> 参照）。FAQというのは、頻繁に訊かれる質問なんですけれど。ここにデータベースを作りまして、うちの大学が。例えば、“Where is the music library?”、ミュージックライブラリーは分館ですので、これをク

リックすると答えが出てくる。上のほうの2個目にあるんですけど。これは地道に私たちが、よく訊かれる質問があると、答えも入れて、ということをやっています。けっこう人気があってね、これ。けっこう使われるんですけど。

あと、Visitors というのは、どこに何があるか。あと、電話でも、やはり連絡していただいてもいいですし、あとはテキストメッセージで質問をしていただいてもいい。あとEメールでもいいです。このテキストメッセージというのは、テキストを入力していただくとレファレンスのEメールがアカウントに入ってきますので、それでリプライできます。

あと、このサブジェクトスペシャリティですけども、やはり教員の方とか、かなり込み入ったリサーチをしている方は、やはりサブジェクトにすごく詳しい人と話したいというのがありますので、私たちはこういうものを作って、例えばエデュケーションとかこの人に訊けというような、そういうようなこともやっています。

あと、科目別ファイル。これは、たぶん日本でも使ってみえると思うのですけれど。リブガイド、サブジェクトガイド、使っていますか？ これは、やはり司書の仕事であって、一つひとつ科目別になっていますよね。私はこの責任があるのですけれど、アートマネジメントとか、オーディオテクノロジーのリブガイドですとか。けっこう簡単にコンテンツが換えられるので、けっこう変えていますね。日本と違って……私は日本は分からないのですけれど、私がリサーチしていた時は、けっこう大きなデータベースが全てサーチしてくれるというか、そんなにたくさん数ではないというか……。

うちの大学は、だいたい300データベースぐらい持っていますので、やはりこういうリストを作らないと、学生さんがどのデータベースでリサーチをしていいか分からないということで。それで、全て特徴も違いますので。ということもあって、各データベースを分析して評価して、そしてこれならいいだろうということでガイドを作成するのは司書の仕事ですね。音楽科の学生は、これを使ったらいいというような、ミュージック関連のデータベースを選択します。

私たちも、やはり日本の図書館みたいに要領よく、検索するのが簡単になるように、SEARCH: Everything, Articles, Books は、あるのですけれど。これはなんていうのかな、ライブラリーのカatalogがありますよね。カatalogがあって、あと本で、あとデータベースがあって、アーティクル用データベースがある。300ある。その上に、こうやって乗せたものなんです。上にレイヤーを乗せて、それでサーチするので、このサーチボックスってというのは。だから例えば検索で1単語を入れても、ものすごく関係のないものが出てくる。だから効率がよくない。司書によっては大学1年生はまだリサーチの仕方がよく分からないということで、インフォメーションリテラシーの時にサーチボックスを教える司書もいるのですけれど、だいたい2年生、3年生からは、こちらのサブジェクトガイドに行くように、やはりトピックに合ったデータベースを使おうという指導をします。サブジェクトガイドは全ての科目にあります。司書が選んだデータベースですね。というように、私たちは、利用者のエデュケーションをしています。

ユーザーサービス (スライド9参照)。さっきも言ったように、やはり職員さんがタスクはしていただきますので、これは全てスーパーバイザーの、上司のポジションになるのですけれど、ユーザーサービスはやはり全てカウンター業務もですし、ILLもですし、全て入ります。ライブラリアンというのは、その仕事に詳しい者が、やはり司書がいちおうやる仕事です。

あと、レファレンスライブラリアン、一番下にあるのですけれど。このように仕事を募集する時に、やはりこのように募集するのです。テクニカルサービスライブラリアンとか、ユーザーサービスライブラリアンとか、といった形で募集します。エレクトロニックリソースライブラリアンというのは、データベースとかを購入したりする。一番最後にレファレンスライブラリアンというのは、やはり歴史的にも一般的なレファレンスライブラリアンを募集するのですけれども、でも最近の傾向としては、やはりレファレンスライブラリアンとしても専門を重視していますので、学士は何を専攻したかということ、まず募集した時に、それも言います。例えば「レファレンスライブラリアン募集。でも、国際学部詳しい方」というように、レファレンスライブラ

リアンとして募集しても、やはりその特定の専門を入れることがありますので、そうやって要求することがあります。ほとんどそうですね、最近は。

じゃあ次は、任務じゃなくて義務です（スライド10参照）。義務と言ったのは、このポイントが、このカテゴリーといいますか、私たちの給料とか、あと契約が決まるポイントになりますので。特にアカデミックライブラリアンの場合は、2つあるんですよ、契約の仕方が。ひとつは、年間契約です。これはアカデミックライブラリアンの年間契約です。もうひとつは、終身雇用のポジション。それによって、やはり評価のポイントも違ってきます。終身雇用の場合はやはり、リサーチが20%。年間契約の場合は低いんですけど。これは実際には、リサーチは20%ではないですね。いちおうマニュアルには20%と書いてあるんですけども、重みとしては40、50%ぐらいにはなりますので。司書の任務は、今述べたように、ポジションによって違いますから、それを、1年の最後にレポートを書いて、何をしたかをまとめるんですけど。リサーチは義務ですので、それで出版が一番重視されています。あと、学会の発表。

だから率先してやらないと、終身雇用をいただけるまでに——終身雇用というのは、だいたい6年目で審査が入るんですね。6年目で審査が入って、それで例えば大学側が、終身雇用OK、合格と言え、そこからはクビにならない。ですけど、そこでダメと言われたら、その後1年間いただけるんです。1年間いただけるんですけど、それはなんでかということ、1年のうちに仕事を探せ、それが終わったらクビということで、けっこう厳しいんですけど。そういうふうになります。やり直しがきかないということ。

あと10%は貢献ですね。貢献というのはサービス。だから、例えば委員会。大学の中での委員会に参加して貢献する。何かボランティアをして、学部でボランティアして貢献する。それが10%。だから、その終身雇用の場合は、やはり6年目に厳しい審査があるということで、かなりのリサーチの義務がありますので。リサーチ、出版、そういうこともあって、年間契約の方が必要になるのです。年間契約は、その穴を埋めるために。やはりリサーチ休暇とかいただけますので。3日かな。うちの大学は1カ月に3日ですね。だから、家でリサーチしていいというものです。そうすると、やはりしわ寄せがきます。それを補うために、年間契約の方が雇われるんです。だからリサーチは、年間契約の方も多少はしなくてははいけないけれど、でもそんなにもしなくていい。それよりも、メインの司書の仕事をすることになります。だから、これのポイントによって給料が、うちの大学の場合ですけど、一律で上がらないので何%、1年につきというようなものがないので、いちおう成績をいただくので、この3つのカテゴリーの中で。それに委員会がありまして、みなさんが何をやるかを見て、それからアドミニストレーションにいて、それで給料の割合が決まる。そういうふうになります。

いきなりサブジェクトライブラリアンのことを話します（スライド11参照）。サブジェクトライブラリアンは、専門知識を有する司書ですね。これは、主にアカデミックの場合だけですね。公共図書館司書には使わない語です。有利な点、これはもう言わなくても分かるんですけど、専門的な知識を持つため、より深くリサーチに貢献できる。特に専門用語についてです。例えば私の場合は音楽分野で専門用語も知っているの、学生が来やすい。教員の方が本とか書いてみえる時には、やはりこちらに来て、「僕はリサーチをこれだけしているんだけど、もっとある？」のような。「何もミスしたくないから、これ以上まだあったらもっと出してくれよ」という感じで。そういうことがあります。

あと、授業の内容に詳しくなる。私自身も音楽科出身ですので、やはりどのような課題が出るとか、どのようなことが重要かというのが分かっていますから、つまり学生がやったことを、もうやりましたから、そういう面でも内容に詳しいし、課題にも詳しい。あと、課題の場合ですが、インフォメーションリテラシーをする時にサブジェクトライブラリアンだと、やはり人間関係をかなり築くことができますので、良い関係を。それで、課題がある時には、私はインフォメーションリテラシーのほうのコースを頼まれる時は、「課題は何が出ているの？」と、最初に言うんですよ。ただ漠然とインフォメーションリテラシーはこれだ、ということ学生は寝ますから。だからそれよりは、課題が出ていて、学期末にこういう課題をやらなきゃいけない、こういうリサー



チをやらないといけないという状況ならば、それに合わせてデータベースを教えます。一般的なインフォメーションリテラシーについても教えるけれども、今からはこの課題に合ったことを言うからね、と言うと、すごい効果がある。学生がどこから始めたら分からないということがないので。ですから、私はインフォメーションリテラシーの講義を頼まれると、いつも先生に課題のリストを下さい、授業要項をください、ということをして、私自信も実際には宿題をすることになるのですけれども。それで学生さんには教えるということをしています。そうすると能率いいリサーチをやってもらえるし、学生も寝ない。ということです。

あと、学部のイベントに関わる。これはけっこうボランティアとかをすることがあるんですけど、あとでまた例をあげます。そうすると、インフォメーションリテラシーのリクエストが増加する。やはり、関係が深まれば深まるほど、先生もこちらに訊きやすくなりますので。「今度、来てくれないかな」みたいな、けっこうカジュアルに、お互いに構えないようになります。そういう雰囲気を作り出すということです。

これ“質の高いコレクションデベロップメントができる”、一番大切なんです（スライド12参照）。この有利な点。なぜかという、いま言ったように、やはりインフォメーションリテラシーもしていますし、課題も対応していますので、どういう課題をしているかも分かります。自分も専門知識があるので、何が重要かも分かっています。あと、個人へのリサーチヘルプ、そういうのも充実していますので、学生がどのようなリサーチをしているか、ライブラリアンは知っていますので、そういうことに基づいてコレクションデベロップメントできる。

すごく心配なのは、日本の図書館のベンダーさんがコレクションデベロップメントを担当するというのは、ベンダーさんでは図書館の予測ができないという意味で心配です。将来の予測ができない。例を言わせていただくと、私どものアメリカン大学の音楽科は、学士課程しかないんです。でも、例えば大学と図書館が関係を深めていって、それで会議とか出ていたりして、教員の方が、もう3年後にはやはり修士を提供しなきゃいけないね、というようなところに向かっていくことを知っていたら、図書館はそうのようにコレクションデベロップメントをしなきゃいけない。大学側が修士の音楽科を提供した時に、リサーチのリソースが全くない。資料が全くないではいけませんので、少しずつそのためのコレクションデベロップメントをして、質の良いものを購入していかなきゃいけないということで、それはものすごく有利ですね。だからベンダーさんがやられるのもいいと思うのですけれども、大学のカリキュラムで何が起っているか、学生がどういう資料を使っているか、どういうリサーチをしたか、そういうことをベンダーさんは分かってみえないと思うので、それはすごい不利だと思います。だから専門の方が、やはりするといいと思います。

あとは、専門部門の予算が自由に采配できる。これはサブジェクトライブラリアンは、アカデミックではそうなんですけれど、自分の分野の資料費の予算がいただけます。そうすると、自分のやはりいいように使える。やはりサブジェクトライブラリアンはそのサブジェクトに対しては知識がありますから、だからそういう自信があって、自信をもって購入もできる。じゃあ、この割合でこれを買おう、この割合でこっちを買おうということもできますので、予算の自由がきく。

あと、教員とコラボレーションができる。学会で発表したりすることもありますし、やはり本を借りてみえる教員の方に対して、それぞれにリサーチヘルプをすることもありますし。

あと、最新の情報交換ができる。教員の方はよく学会に行って、新しい情報を仕入れてきますので、やはり人間関係が良くなりますと、そういうことをけっこうお話ししたりしますので。そんな込み入った話でなくていいんですけれど、例えば廊下で会った時に、「何が新しいの？」みたいな感じで。「こんなことがあったのよ」みたいなことを。それは重要なことです。

不利な点（スライド13参照）。不利な点は、学部との関わりが深まるほど、忙しくなりますね、やはり。むこうも要求してくることが多いので、非常に忙しくなります。あと、専門以外の他の分野について、ちょっと疎くなる。やはり私も音楽の分野のデータベースとかについては詳しくても、ビジネスで何が起っているのかは疎くなります。

あと、大学図書館側としての不利な点。全ての大学にサブジェクトライブラリアンを置くことは無理。だから、やはりそういうことでも大学図書館の中で会議があった時に、一人人材募集はあるけれど、レファレンスライブラリアンのオープニングはあるけれど、どのように募集しよう。例えば、大学の状況をよく見て、国際学部がものすごくいま進んでいるし、絶対に専門の知識がいるからというふうになれば、レファレンスライブラリアンを募集する時に、そういう知識を必要とします、そういう方を探していますというように募集します。

あと、サブジェクトライブラリアンが成功するかしないかというのは、もちろん司書の能力もありますし、あとは性格も関わってくるんです。いま言ったみたいに、学部にどんどん入っていきなさいいけないので。日本でもあまり変わりがないと思うのですが、司書の方は、やはり教員というランクをいただいている、ちょっと下に考えられるという事実がありますので、それにめげずに学部でグイグイ入って行って売り込む。カーセールスマンのようにグイグイ入ってくる、そういう性格じゃないと。やはり恥ずかしがり屋さんとか、そういう方もいますので、それはちょっと難しいかなと、向いていないかな、ということがあります。

次は、アメリカン大学でのサブジェクトライブラリアンについてお話ししますね。レイチェル（スライド14参照）。うちの科学のサブジェクトライブラリアンなんですけれども、すごく優れた子なんですけれども、仮装が大好きで、何かイベントがあると絶対に仮装する子なんです。受け持ち分野は、いちおうサイエンスの学部なので、これは全て彼女の受け持ちの分野。本も買いますし、データベースの分析、最新分野の情報も、そういう責任も彼女です。

あと、学部とのコラボレーション。これは、ほとんどさっき説明しました、大学への貢献というか、私たちが評価される10%か20%にあたるサービスです。それは、彼女はコラボレーションで、学部ラウンジでのオフィスアワーとしてやっています。司書は、コンピュータを貸与されるんですけれども、全てノートブックなんです。どこでも行けるようにということで。ノートブックを持ってラウンジに机を出して、オフィスアワーを設定する。あと、“ダーウィンデー”とか、“DNAデー”とか、“お化け屋敷”とかいったイベントもやります。ディスプレイを出して「乗っ取られた、呪われた図書館」みたいな感じで、「私は司書です。もしリサーチのヘルプがいる時は来てください」と、そういうことを情報を知らせるということ、つまり売り込むということも、私たちはしなさいいけないので。彼女はいつも、けっこう注目を浴びていますね。お化け屋敷でお化けの恰好をしたみたいです。いつもバナナとか着ていますから、たまに（笑）。私が一番気に入っているのはバナナなんですけれども。この写真は、おサルさんです。

サブジェクトライブラリアンの最近の傾向（スライド15参照）。この言葉は、けっこう、いま日本でも言われていると思うんですけれども、“エンベディッドライブラリアン”。学部の中に所属するライブラリアンですね。2つの種類があります。まず、完全に所属する司書。その学部で所属する司書というのは、オフィスがあります。もうひとつの所属しつつある司書は、“ハイブリッドエンベディッドライブラリアン”です。オフィスはないけれど、入り込もうともものすごい努力をしている。その努力の一環として、オフィスがないからラウンジにテーブルを出したりしています。あと、バーチャルでのレファレンスをします。むこうではブラックボードとこのを使うんですけれども、1つのクラスの中でバーチャルレファレンスという、そういうことを入れたりしてやっていますけれども。

私ごとで申し訳ありませんが、いい例がなかったので自分の例を出します（スライド16参照）。私はいちおうエンベディッドライブラリアンの、完全にエンベディッドされたライブラリアンの一人で、音楽科の中に私のオフィスがあります。だから、図書館の中にはありません。私の分野は、ミュージック・アンド・パフォーマンス・アーツなんですけれども、オーディオ技術とか芸術経営学も担当しています。

あと、いま私たちの義務として10%は大学への貢献で、20%は出版とかしなさいいけない。つまりリサーチの部分ですね。いちおう英語では scholarly creative work という、そういうカテゴリーなんです。私の例を挙げてみたのですが、私の場合は、出版もしないといけません。分野が分野ですので、クリエイティブでもいいのです。だから私が共演したり、こうやって演奏したりすることも認めていただけるので。



それは20%に入ります。だから、この3つですね、大学オーケストラとの共演とか、音楽学部の教授の新作CDのレコーディングとか、学会でも発表します。あとは、伝統芸能の講義。これは自分でリサーチして、興味があるので、能とか歌舞伎とかの講義を頼まれることがあるので。これはシアター芸術専門の先生方に頼まれて、そういうこともやります。これは、私の義務の1つとして、リサーチ部門の1つとしてポイントをいただける。

あとこの下（スライド16中の学生リサイタルの事前審査、打楽器セクションの指導、学部リクルートイベント）は、大学への貢献です。委員会に所属するのもいいんですけども、こういう学期末の実技試験の審査をやってくれるかときかれることもあるので。音楽学部で打楽器を教えているので、いちおうそういうこともあるし、あとはセクションの指導とか、リクルートするとか、そういうもののイベントにも、学部に対しての貢献をしています。それは、大学への貢献10%としてポイントがいただけます。

マイケル君は、ビジネスライブラリアンです（スライド17参照）。マイケルくんはハイブリッドエンベディッドライブラリアンです。マイケルは、オフィスがないので、ビジネススクールに。だからこのようにラウンジにテーブルを出して、ノートブックを出して、学生がいる所に行く。学生に来てもらうのではなくて、学生がいる所に行く。そうすると学生が来やすくなる。例えば、図書館というのは、けっこう構えたところがあるので、来にくいと言われる学生さんがみえる。そうだったら私たちが出ていこうということで、彼の場合はよく学部でサービスをやっています。学部のラウンジで。あと、学部のコラボレーション。彼もやはり大学への貢献の義務があるので、コンクールの審査員などをやっています。

一般的な採用プロセス（スライド18参照）。ここでは、アカデミックライブラリアンの採用プロセスを例にあげますので、後でパブリックライブラリアンの採用プロセスについて、あまり詳しくないのですが、もしあったら質問してください。

全国に募集します。それは決まりで、全国募集をします。全国募集する時にどこにするかというのと、やはりライブラリー関係のジャーナル、あとはウェブサイトに出します。やはり司書の卵とか、司書の方が見るところですね。そういうところに全国募集を出します。まず履歴書審査。ぶっちゃけた話をしてしまうと、私も採用委員をしたことがあるのですが、だいたいアカデミックの場合は、終身雇用の募集ですと、だいたい100通ぐらいですね。あと終身雇用でなく年間契約の場合は、だいたい、それでも60通から70通、それぐらいの履歴書を受け取ることがあります。それは地域によって違いますけれどね。都会のほうがやはりたくさんもらい、田舎のほうはちょっと少ないです。

それから面接の審査です。履歴書の審査の後に、一般的には3人ほどですね、100人の中から3人ほど選択して、面接に来ていただく。面接に来ていただく時は、やはり大学側が全て旅費を出します。ほとんど全日の面接になります。大学のツアーから始まって、採用委員会との面接。それから、面白いと思うのは、待遇の説明。もしあなたが仕事をもらったら、私たちはこのような待遇を提供します、社会保険もありますよとか、そのようなことの説明もあります。

あと、昼食。昼食の後にプレゼンテーションですね。最後の3人の方、やはり面接に来いと言われた方には、トピックが送られます。「面接に来てくれ。プレゼンテーションでのあなたのトピックはこれです」というふうに言われますので。3人とも同じトピックですけど。そういうことでプレゼンテーションを、だいたい50分ぐらいすることになります。

それから、図書館長との面接。あとは学部長との面接。これはある時と、ない時もありますけれど、今はほとんどありますね。専門的な司書を入れたいということで、学部長にも会っていただいて、どうするかを判断します。

最近の傾向（スライド19参照）。司書に関しての最近の傾向というのは、やはりエンベディッドライブラリアンシップが大きいですね。司書を図書館に閉じ込めるよりも出ていく。学部に出ていってくれ、どこかに出ていってくれ、というような傾向があります。だから、サブジェクトライブラリアンの重要性は、そこにあり

ます。

あとはリサーチデータ司書の採用。これなんかは、けっこう新しいのですけれど。率先して、色々な大学がリサーチデータの専門の方を採用している所が多いです。うちも、6ヶ月前くらいに1人雇ったのが、リサーチデータの専門の司書です。

施設については、ラーニングコモンズ。ラーニングコモンズは、リサーチに関するものは全て図書館に入れてしまおう。だから、図書館に来れば、何でもリサーチに関することはできる。例えば、グループスタディもできるし、会議もできる。オンライン教育の設備も整っているし、色々なソフトウェア、学生さんが買えないようなたくさんのソフトウェアも、こちらで提供しているし、あとは3Dプリンターもあるし。テクノロジーセンターやライティングセンター。ペーパーを書く時に、やはりアシスタントがいる時がありますので、それも全て用意します。

そこで困るのがスペースです、やはり。そのために図書を移動しなければいけない。ということで、今はほとんどの大学が倉庫を持っています。うちの大学もそうなんですけれど、倉庫をいちおう持っていて、ジャーナルのバックナンバーは全てないです、うちの大学は。全て倉庫です。だから1年か半年前までの号はありますけれども、やはり古いものは全て倉庫に持って行って。あとはカタログからリクエストすれば、次の日には取り出せます。

あと、図書の購入に関して。いま流行っているのが、DDA。PDA といったら、たぶん分かり易いかな。Patron Driven Acquisition。今、むこうでは DDA といいます——Demand Driven Acquisition。内容はいっしょなんですけれど、今はこの言葉を使っていますので。どのようになるかということ、利用者の希望、利用者が直接、コレクションデベロップメントをしてしまう。どういうふうになるかということ、機能としては、例えばベンダーさんがいますよね。私としては、アキュイジションライブラリアンに、じゃあ、音楽の新刊の電子ブック——これはやはりスペースがありますから、買い続けることができませんので、電子ブックが必要なんです——バロック時代について全てカタログ(蔵書目録)に入れてくれ。そうするとベンダーさんが既存のイーブックを全てカタログに入れてくれます。そうすると、ユーザーさんは知らないですよね。だから、「バロックの音楽があるじゃないの」と、クリックすると電子ブックが開きます。そうするとそれを1回とカウントします。ベンダーによるんですけれど、3回までクリックされたら、同時にそれは司書を通さないで、それはもう買ったということになります。大学が買ったとみなされます。それが DDA です。だから書誌レコードと電子ブックは、ただでベンダーさんが大学のカタログにアップロードしてくれます。ベンダーさんによっては、何回クリックされなければ、それは自動購入になりませんよ、というのはあるんですけれど。そういうシステムですね。けっこう流行っているんです。最終的には、そればかりではコレクションデベロップメントはできませんので、最後には、司書がちゃんとキャンセルはできると思うのですけれど。

利用者分析。ビジネスで使われている、例えば製品とか、メーカーさんが使われているビジネスの分析も、それを図書館界も使い、将来の計画を立てる。例えば、この本を買った人は何歳ぐらいだとか、そのようなことですね。この本を買った人は、この本も買う。そういうようなデータを分析し、コレクションデベロップメントをする、そういう傾向にもあります。

それで、最近の傾向を知るには(スライド20参照)。これは当たり前のことなんですけれど、学会への参加ですね。学会というか、協会への参加ですね。アメリカですとやはり ALA、アメリカン・ライブラリー・アソシエーションがあります。一度機会があればぜひここにくるとすごいと思うのですけれど、すごいスケールが違うので。ほとんどパブリックライブラリアン、公共図書館のライブラリアンの方の協会なんです、ALA は。でも、その中に、やはり枝分かれして専門部門があります。アカデミックの方は、大学のリサーチ専門部門に所属しています。ALA のカンファレンスがあると、大学リサーチ部門の提供するセッションに参加します。かなりデカイです、ALA は。ALA 以外の協会というのは、ここに示したように音楽図書館協会もありますし、専門図書館の協会もあります。そういうところで、やはり最新の情報を聴いて、そこで学んでください、色々。

あと、図書館関係のジャーナルをとる（スライド21参照）。これも当たり前ですけど、そこに出版する方が、たくさんいらっしゃいます。あとは、好奇心を持つ。簡単なようなんですけど、やはり好奇心がないと。みなさん、司書になるのですから、決められたことをやるよりは、ちゃんとこれから自分がこれを上達させるんだとか進化させるとか、そういう積極的な好奇心をもって、新しいことを学んで、そういうことをしていただければな、と。

あとは、学会に参加するだけでなく、自分が何か発見したら、やはりそれをお互いにシェアする。ふつう人間なら、僕が発見したんだから教えたくないというのは、誰でもあると思うんですけど、それを脱ぎ捨てて、みなさんとシェアして、それで意見も聞いて、それでなおかつそれを上達させた状態で、またシェアするとか、そういうことも必要です。アメリカのライブラリアンはリサーチの義務があるので、学会に参加するだけでなく、やはり競争して発表しないと。学会になると、プレゼンテーションの募集がきますよね。そうすると、やはりけっこう競争率は高いです。

最後に、これは「何事にも積極的になろう」ということです（スライド22参照）。さっきも言ったように、司書になるには、やはり自分が何をやりたいとか、そういうことをちゃんと分かって、いろんな視野、いろんなところから見て、どうしたらこれが上達するか、そういうことをちゃんと考えていただきたいです。やはり国民性的にも、日本の方はすごく恥ずかしがり屋ですし、けっこう消極的なところがあるので、すごい難しいと思うのです。それとシステムも違いますので、やはり色々なしがらみがあって、それは私も分かっていますけれど。それから、派遣さんのこともありますし、大学のシステムもありますし、そういうことも分かっているんですけども、誰かがやはりやり出さないと始まらないことですから。だから、それを待つというのは、やはりあなたたちはすごい若いですし、「誰かがやるだろう」と待つ姿勢よりも、「じゃあ、私がやろう」という、そういう気持ちになってほしいと思います。「出る杭は打たれる」という表現もある。それも分かっていますけれど、よく言えないですけど積極的にやっていただきたいなと思います。

これは、私の連絡先です。何か質問があったら、メールしてください。日本語も読めますし。どういうことでも大丈夫です。伊藤先生とも、グーグルでビデオチャットしましたけれど、そういうこともできますので。何か質問があったら、ぜんぜん構わないですので、2、3日かかるかもしれないですけど、返事に。メールしていただいてけっこうです。

では、これで終わりです。ありがとうございました。（拍手）

【司会】たいへん興味深いご講演をいただいたと思います。

日本の情報リテラシー教育ということで、司書がどんどん関わっていくということもやっていますし、それ以上にアメリカの場合は、ノートパソコンを引っ提げてラウンジに出て行って大学の中で教育に携わるようになっていて、それが1つには、司書の専門性に深く関わっているのだなあというふうに思いました。

では、まだ20分ぐらい時間がありますので、ぜひ色々なことをお訊きいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【男性1】人間情報学部の教員をしています。

私は専門が物理なので、ぜんぜん違うお話が聞けるのが、とても楽しくて。しかも図書館のライブラリアンから見た大学だとか、それから世界がどういうふうに見えるのかなという一端を感じられて、とてもおもしろかったです。

2つ質問させてください。主要なメッセージは「率先して働こう」なんですけど、ちょっとそれとは外れて細かい話で恐縮なんですけど。

1つは、音楽関係のリソースに関して、まとめられるというか、それを紹介する立場にあるというお話だったんですけど、物理だと例えばCERNでウェブを作ったりとか、あとはアーカイブでほとんどのものが、何も気にしないで、今は見れるようになっている状況があるのですけれども、音楽関係のそういうアーカイブみ



たいなものというのを1つの大学だけでなく、構築しようという試みがあるのかな、というのが最初の質問です。

2つ目は、最後のほうの電子書籍に関することなんですけれども、例えば日本ではあまり大学の授業でというのは、まだまだなんですけれども。例えば、アマゾン・ドットコムなんかでは、ステューデントに対しては、キンドル版は何か月間だったらいくらで購入できますよ、なんていうのがありますよね。日本ではちょっと、我々の大学ではちょっとピンとこないのですけれども、電子書籍を大学で借りるというのはどういう形態なのか、あるいは利用するというのはいかような形態なのか、というのがちょっとピンとこなかったものですから。つまり、自分のところにダウンロードできるのか、というようなことなんです。

1つ目は音楽図書館、音楽関係のデータベースみたいなものが作られているのか、試みがあるかと、2つ目は電子書籍の貸し出しについてです。

【松岡】はい、分かりました。

1つ目の質問なんですけれども、アーカイブですね。例えば教員の方が何かを発表されたとか、そういうことをやはり残していきたいと思うわけです。教員の方が発表したものでなくても同じですが。

そういうのは、やはり（図書館関係の）協会に行った時に、そういう話も出るんですね。ただ音楽については、いまお見せしたいのですけれども（AU Music Library Sheet Music Collection <<http://ausheetmusic.wric.org>>）。私が今、うちの大学でやっているのは、こちらなんですけれどもウェブでこのシートミュージックコレクションというのは、やはり著作権が関係してくるので、どれをオープンソースにできるかという、そういうことですね。その一環としては、私がアメリカに来た時に、ものすごい古い楽譜があったんです。それはもう1920年代あたりのものです。コピーライトが1923年ですから、それ以前はデジタルにしても著作権に関わらない。ということで、じゃあその中でデジタルにしようということで、それはしてますよね。それで音楽協会に行った時に、やはり同じような状態の人がいて、じゃあそういうんだったらデジタルにして、世界の方に使っていただく。著作権も切れている。そういうことで、いちおうローカルに、こういうふうに使っているのですけれども、ローカルだけでは、やはり知られないということもあって、音楽協会に行った時に、このシートミュージックコンソーシアムというのを立ち上げようということで、色々な大学が、「うちもこの古いシートミュージックがあるから、そういうのを立ち上げよう」みたいな、頑張ろうということをして、それでこれを立ち上げたのがUCLAです。UCLAが政府から助成金をいただきました。シートミュージックというのは、やはり絵とか、その時代の言葉とか、やはり文化の保存ということもあって、そういうことを強調して、UCLAがこれを率先して、「僕たちがデータベースを作ろう。だからみんな、もしよかったらそれに協力してくれ」と呼びかけました。だから今、コンソーシアムで、うちの大学とか、アメリカ議会図書館もそういうものがあるので、じゃあこれだけはうちも提供しましょう、というようなことです。だから、このコンソーシアムにあるシートミュージックのデータベースというのは、世界的に分析するとスウェーデンで使われたとか、メキシコでとかかなり違う国で使われていることが多いのです。そういうことで貢献しようとしています。

だから、アーカイブはデジタル化していますので、OCLCというシステムがあるのですけれども、そちらがプラットフォームを作っていて、うちの大学はそれを買って、そのデータとこのプラットフォームとつなげた状態です。UCLAと提携して。というふうになります。

だから、やはり著作権がクリアできれば、先生方の貢献されたジャーナルとか、そういうのも残していこうという傾向です。

【男性1】なるほど。著作権がやはり鍵になるのですね。

【松岡】そうですね。

【男性1】物理だったら、物理粒子は著作権がないので（笑）。

【松岡】そうだったら、やはりデータベースでこうやってプリザーブできる。保存できるでしょう。

【男性1】あと、これがようするに、ある程度網羅的になってきているというのが非常にいいなと思って。物

理のアーカイブも、四半世紀ぐらい前にスタンフォードでスタートして、その当時は若い一部の研究者という感じだったのですけれど、今はほとんど全ての論文とか研究ノートみたいなものを、そこで見れるから、べつに田舎のぜんぜん図書がないような所の研究者でも、なんでもできるようになっているのですが。これもだんだんユニファイしていったって、同じプラットフォームでいろんなことができるようになったら、とてもすごいですね。

【松岡】そうですね。今は、インスティテューショナルリポジトリというのですが、それは、そのキャンパスに行けば先生方のアーティクルも全部読めるし、というのはあるんですよ。それは出版社の方が、それなら著作権はいいだろうというOKをいただくと、そのキャンパス内でのデジタルのアクセスというのはOKなんです。それを世界に出してしまう、オープンソースに出してしまうと、やはりいけないのですが。この場合は、だからみなさん、今はどこの図書館でもアーカイブはしていこうという傾向があります。

【男性1】2つ目の質問は、むしろ著作権と使用権みたいなものが関係してくると思うのですが、実際にアメリカの図書館で電子書籍を閲覧したりだとか借りたりだとかは、どういう形でなんですか。

【松岡】じゃあ、これ見せましょうか。そのほうが早いですよね。どのようになっているか（図書館の蔵書目録検索画面を表示）。

例えばこの本、このイーブックがあるとしますね。これがやはり、いま言ったようにレイヤーになっているので、これがほんとうのカatalogなんです。ここは「クリック・ヒア・アクセス」というのがありまして、ここにクリックすると、本がそのまま出てくるんですよ。タブレットがいま流行っていますので、タブレットで学生さん、ここからこれを読んでみえる方が多いですね。本とか。これはやはりうちの大学がお金を払っているのを見せていただける。ログインすると、ですね……。このようにタブレットでも、すぐ開きます。この目次をみることができます。これで私は、この本を開いたので、さっき言ったように、デマンドドリブンアクイジション（DDA）で、1回、私はこの本を開きました。また違う人が来て、私でもいいんですけども、2回目にクリックしました。ベンダーさんとかその出版社によるのですが、3回クリックしたら自動的に買ってくれる、というような、そういうことですね。それから、電子書籍は、アクイジション担当者が、すごい悩んでいる。本とか出版社によっては、1人が読んでいる場合は、ほかの人は読めない。別の本や、出版社によっては、ダウンロードもできる。でもプリントはダメ。だから出版社によって、全部違うんです。

【男性1】ダウンロードできるものもあるんですか。

【松岡】あります。

【男性1】例えば、ふつうの本だったら、図書館へ行って1カ月借りますよね。電子書籍の場合は、同じように1カ月の使用権が得られるというようなことになるのですか。

【松岡】いや、そんなことはない。これで、画面をクローズしてしまえば、もうログアウトしてしまうので、またもう1回その本を探して、また検索し直さないといけない。けども、本によってとか、その本を購入する時に、ライセンスの問題になりますので、1人が見ている間は誰も見れないとか。例えば、マルチプルライセンスというんですけど、複数の人が見ていても開けるといふものがあるので。例えば、私が買う時には、書籍でも、人気が出そうなものがあれば、シングルライセンスでなくて、マルチライセンスで買えば、クラスの人、クラスの学生全員が同時にアクセスしても見れる。だから、出版社によって違います。

【男性1】ありがとうございました。

【松岡】あと質問は？

【女性1】学部3年の学生です。国債とITとマーケティングに興味があって勉強しています。

質問は2つあって、1つは図書館とは関係ないのですけれど、アートマネジメントで、鑑賞者の客層が、高年齢・高収入・高学歴に偏る問題があると思うのですが、松岡さんは学生に対して、どのようにアートを工夫して勧めているとか教えて下さい。

【松岡】それは、ものすごく質問を受けますけれど、そのために私はどのようにというよりも、データを示し

ます。あなたはそうやって思っているけれども、それは事実なのかしら、と。そのデータを出してあげて、それで「ああ、やっぱりそうね」ということになる、それに対して「どのようにしたいの?」と。司書としては、学生がレポートを出さないといけないから、じゃあ、自分の考えを言ってみて、と。高齢者・高所得者が中心だったら、そのペーパーとしては、自分は何を言いたいのかと指導します。その学生がじゃあマーケティングをもっと違うふうにしなきゃいけない、というアイデアを出してきたら、そのマーケティングのことを調べようか、ということになって、それでデータベースについて、じゃあマーケティングとアートのオーガナゼーション、それがどのようにして、それがどのように能率よくやられているか、というようにステップを進めていきます。司書としては、ただデータをあげるだけでなく、学生さんが考えを構成しはじめ、どのように考えて、どのように自分のペーパーを構成しようという、そこまでやはりヘルプするのが司書の役目ですから。

レファレンスインタビューというんですけど、やはり学生さんも、私に会いに来るんですけど、あまりトピックが決まっていない(笑)。分かります? だから、そこをちょっとつついて、「何が聞きたいの」と言う。私は、どのデータが手に入るのか分かりますから、突拍子もないことを言っていると、それはデータが出しにくいから、進めにくいよ、と最初に言って、じゃあこういうふうを考えてみる? というような会話をして、それでペーパーの構成をどのようにするか考えさせるということが私たちの仕事です。

【女性1】一緒に課題を解決していくということですか。

【松岡】そうそう。それは、私たちの仕事ですね。

【女性1】分かりました。もう1つ、司書と関係ないかもしれないんですけど。

【松岡】いいですよ。

【女性1】アメリカだと、やはり専門性というスペシャリストを求める傾向があると思いますが、日本人だとやはりゼネラリストとか求める傾向があって、なかなかアメリカのようなシステムになりにくいと思うんですけど。日本がアメリカみたいなシステムになるにはどこを直していくというか……。

【松岡】やはり個人ですね。

【女性1】あんまり考えてなかった(笑)。

【松岡】やはりね、みなさん若いし、ほんとうに個人で自分から考えていこう、変えていこうという、やはりその姿勢が一番大切ですね。大学の職員の方が図書館の経営に携わって、その方たちは司書のような知識はない。けれども大学の経営は、その方がしている。司書さんというのは、みなさん派遣さんで来ていただいて。でも経営とか、そういうものには関われない。私が思うには、司書という、図書館に最も知識のある者が、経営とか運営に関われない。これから図書館はどこに行くの? どちらの方向に行くのか。やはりそこから変えていかないといけないかな、という気がします。

【女性1】ありがとうございました。

【司会】短い質問であれば、もう1つぐらい受けられますけれど、いかがですか。

【女性2】人間情報学部の学生です。

ハイブリッドのライブラリアンが、学部所属する司書にあがることはあるのでしょうか。あがるとしたら、何がきっかけであがることのできるのか。

【女性2】あがるというよりも、それはやはりその個人次第と、学部の関係もあるんですけども。ハイブリッドの方は、所属したいのです。でもスペースがないと、オフィスのスペースが限られていますし、学部のほうがあまり協力的でないとか、そういうのはやはり人間関係の問題で、昇格するからオフィスがもらえるとか、そういうのではなくて、状態によります。だから、ハイブリッドが、もしオフィスが学部にいただけないのだったら、その状況でできるだけやるという、そういう状態です。

【女性2】ありがとうございました。

【松岡】あと質問はありますか。



【司会】では、そろそろ時間になりましたので、みなさんどうもありがとうございました。最後に感謝の気持ちを込めて、拍手でお礼をしたいと思います。どうもありがとうございました。

【松岡】頑張ってください（笑）。

スライド資料

## 米国アカデミックライブラリアン

松岡伸枝  
音楽・舞台芸術専門司書  
Music/Performing Arts Librarian  
American University




1

## 米国司書概要

### 司書の種類

- ・アカデミックライブラリアン
- ・公共図書館司書
- ・専門図書館司書
  - ・法学司書
  - ・医学司書
  - ・企業専門司書
  - ・政府関係司書



2

## 米国司書概要


- ・ **年俸の中央値（全域）** ¥5,600,000 (\$55,370)
  - ・ 給与の範囲 ¥2,230,000 - ¥ 34,000,000 (\$22,000 to \$331,200)
- ・ **学位**
  - ・ 修士号 (MLS, MLIS) ALA 認定
- ・ **アカデミックライブラリアンの職階**
  - 大学教員 **Faculty Status**
    - ・ Assistant Librarians = 助教格
    - ・ Associate Librarians = 准教授格（終身雇用）
  - 大学特別職員 **Non-Faculty Status**
    - ・ Professional Library Staff = 特別職員



3

## アカデミックライブラリアン vs スタッフ (Librarian vs Library Staff)

- ・ **根本的な仕事内容の違い**
  - ・ **司書/ライブラリアン**
    - ・ 大学教員の職階を持ち経営に携わる決断権力を持つ
    - ・ 図書館のストラテジックプランニングをする
    - ・ その場に応じた多様の任務を果たす
    - ・ 図書館職員の指導や管理とする
  - ・ **図書館職員/スタッフ**
    - ・ 大学職員であり経営に携わる決断権力を持たない
    - ・ 与えられ限られた任務(タスク)を成し遂げる
      - ・ 例 書架整理、カウンター業務



4

### アカデミックライブラリアン vs スタッフ (Librarian vs Library Staff)

**司書: 図書館のストラテジックプランをする**

- 大学のストラテジックプランを理解したうえで、  
図書館のストラテジックプランの策定に携わる

目標

Goal

VS

ストラテジックプラン

Goal & Action

5

### アカデミックライブラリアン vs スタッフ (Librarian vs Library Staff)

**ストラテジックプラン**

大学の目標

➡

図書館の  
目標

➡

司書と図書館  
職員の目標

**アメリカン大学ストラテジックプラン例:**


- 1) Reflect and Value Diversity:  
多様性を尊重しサービスに反映する
- 2) Enhance University Library and Research Infrastructure:  
大学図書館と研究基盤の向上を目指す

6

### アカデミックライブラリアン vs スタッフ (Librarian vs Library Staff)

**司書**

- 他の教員に加わり大学のガバナンスに携わる
- 大学内の委員会のメンバーになる  
例
  - 学部カリキュラム委員会
  - 大学院カリキュラム委員会
  - 大学予算委員会
  - 学習評価委員会
  - 苦情委員会



7

### アカデミックライブラリアンとしての任務

- インフォメーションリテラシーの講義、授業を担当する
- コレクションデベロップメント(データの分析をしたうえで購入する為の資料やデータベースの決断をする)
- 図書館利用者(教員、学生、職員など)の必要とする情報を提供し、リサーチに関わる
- オンラインでのサービスを充実させる

**(レファレンス、科目別ガイド)**

8

### アカデミックライブラリアンとしての 主な任務


**専門により任務は異なる**

- User Services Librarian/ Public Services Librarian
- Technical Services Librarian
- Administrative Services Librarian
- Acquisition Librarian
- Electronic Resources Librarian
- Reference Librarian

9

### アカデミックライブラリアンとしての義務

- 終身雇用契約の場合**
  - 70% 司書の任務
  - 20% リサーチ(出版、学会発表など)
  - 10% 大学への貢献(委員会など)
- 年間契約の場合**
  - 80% 司書の任務
  - 10% リサーチ
  - 10% 大学への貢献



10

## 必要とされる司書の専門化

サブジェクトライブラリアン

**有利な点**

- ・ 専門的な知識を持つ為よりリサーチに貢献できる
- ・ 教員、生徒とのよい関係をきずく事ができる
- ・ 授業の内容に詳しくなる
- ・ 生徒に出される宿題に詳しくなる
- ・ 宿題に沿ったリサーチ講義ができる
- ・ 学部のイベントに関わる
- ・ インフォメーションリテラシーの講義のリクエストが増加する(又は学部のカリキュラムの一部にしよう)

11

## 必要とされる司書の専門化

サブジェクトライブラリアン

**有利な点**

- ・ 質の高いコレクションデベロップメント(選書、購入)が行える
- ・ 専門部門の予算の自由がきく
- ・ 専門的知識を磨くことに集中することができる
- ・ 教員とコラボレーションしたリサーチを行うことができる(出版、学会発表など)
- ・ 最新の情報交換をすることができる


12

## 必要とされる司書の専門化

サブジェクトライブラリアン

**不利な点**

- ・ 学部とのかかわりが深まるほど、多忙になる
- ・ 専門以外の分野の最新情報についていくことが難しくなる
- ・ 全ての学部にサブジェクトライブラリアンをおくことは不可能
- ・ このモデルが成功するかしないかは、司書の性格と能力にだい



13

## サブジェクトライブラリアンの例

- ・ 生物学、化学、コンピュータ科学、環境科学、数学/統計学、物理学、心理学、衛生

学部とのコラボレーション:

- ・ 学部ラウンジでのオフィスアワー
- ・ DNA DAY イベント
- ・ Darwin Day イベント
- ・ 科学おぼけやしき
- ・ 学生のための科学学会
- ・ 高校生の指導

14

## サブジェクトライブラリアン

最近の傾向

**・ 学部に所属する司書(エンベディッド ライブラリアン)**

- ・ 完全に所属する司書
- ・ 司書のオフィスが学部に設けてある
- ・ 所属しつつある司書(ハイブリッド)
- ・ 学部にオフィスはないがいろいろな角度から学部にオフィスアワーを設けたり、バーチャルでのレファレンスをする。

15

## サブジェクトライブラリアンの例

松岡伸枝(音楽・舞台芸術)

受け持ち分野:

- 音楽、シアター、ダンス、オーディオ技術、芸術経営学

学部とのコラボレーション:

- ・ 大学オーケストラとの共演
- ・ 日本伝統芸能の講義
- ・ 音楽教授による新曲の発表、CDのレコーディング
- ・ 学期末実地試験の審査
- ・ 学生リサイトの事前審査
- ・ 打楽器セクションの指導
- ・ 学部リクルートイベント

16



## サブジェクトライブラリアンの例

受け持ち分野:

- ・ 経営、マーケティング、IT、財務、会計/税務および不動産。


学部とのコラボレーション:

- ・ 学部ラウンジでのオフィスアワー
- ・ 学部主催コンクールの審査員

17

## 一般的な採用プロセス

- 1) **全国募集**
- 2) **履歴書審査**
- 3) **面接（全日）**
  - ・ 大学内のツアー
  - ・ 採用委員会との面接
    - ・ 人事課長からの待遇説明（社会保険など）
  - ・ ランチ
  - ・ プレゼンテーション
  - ・ 図書館長との面接
  - ・ 学部長との面接（場合によって異なる）



18

## 米国大学図書館の最近の傾向

- ・ **司書に関して**
  - ・ 学部に組み込まれた司書
  - ・ リサーチデータ司書の採用
- ・ **図書館施設に関して**
  - ・ ラーニングコモンズ (Learning Commons)
  - ・ 図書の移動
- ・ **図書購入に関して**
  - ・ DDA (利用者の希望による電子書籍購入)
- ・ **利用者分析**
  - ・ ビジネスで使われている分析法を使い将来の計画をたてる

19

## 最近の傾向を知るには

- ・ **学会への参加**
  - ・ **ALA 米国図書館協会**
    - ・ 専門部門（テクニカルサービス、大学・リサーチ、テクノロジー、経営・リーダーシップなど）
  - ・ **ALA以外の協会**
    - ・ MLA 音楽図書館協会
    - ・ MLA 医学図書館協会
    - ・ SLA 専門図書館協会

20

## 最近の傾向を知るには

- ・ 図書館関係のジャーナルをとる。
- ・ 好奇心を持つ
- ・ 学会に参加するだけでなく 新しい発見については積極的にスピーカーとして発表しお互いにシェアする

21

## 最後に

**何事にも積極的になろう**




Image: team-4-hire.com

22

愛知淑徳大学人間情報学会 会告

平成 26 年度人間情報学会講演会

第 1 回 7 月 29 日

「情報専門職としてのライブラリアン」

講師 松岡 伸枝氏（アメリカン大学（米国ワシントン D. C.）音楽図書館長）

第 2 回 9 月 30 日

「環境問題と高齢化社会対応—課題解決技術先進国をめざして—」

講師 川本 雅之氏（トヨタ自動車株式会社技術統括部主査）